第二次「四季」にとって中原中也の存在意義とは何だったか

――「四季」における中原中也、中原中也における「四季」（3）――

加藤邦彦

一、

ここまでわたしは、第二次「四季」における中原中也の詩活動を中心に両者の関係について検討してきた。一方、中原との関わりによって「四季」にもたらされたものがあるとすれば、果たしてそれは何だったのだろう。これまでの検討のしめくくりとして、第二次「四季」にとって中原中也の存在意義とは何だったか、ということについて、創刊後の第二次「四季」の展開をたどりながら考えてみたい。

小川和佑が指摘しているように、第二次「四季」はもともと「明瞭な文学運動としての主張を持」[1]っていない雑誌であった。「「四季」が多数の読者の支持を得て永続したのも、一つには最初から明瞭な旗幟をかかげなかったからだったように思える」[2]とは、丸山薫の言である。実際、創刊号のページをめくっても、創刊の辞どころか編集後記すら掲載されておらず、続く号にもこれといった雑誌としての主義主張はみあたらない。そのなかで唯一、その後の雑誌の方向性を決定づける可能性を秘めていたのが、第二号より第二四号までほぼ毎号掲載されている三好達治による投稿詩の選評だ。しかし、そこでは「どうにも作者が本真剣だとは思へない」[3]といった類の小言が繰り返されるばかりで、ここにもやはり雑誌全体をどこかへ導いていくような強い主張はみられない。

創刊後しばらくの第二次「四季」の特徴を挙げるとすれば、詩にこだわる一方で、翻訳や評論、エッセイなど、詩以外の作品も多く掲載し、みずからの範囲を詩だけに限定しようとしていない、ということだろうか。見方を変えれば、詩を主軸としながらも、雑誌のテリトリーを詩だけに限定しないことこそ、初期の第二次「四季」の主義であり、思想であった、ととらえることができる。もちろん、詩篇しか掲載しない詩雑誌というのは逆に少ない。しかし、そうした第二次「四季」の性格を裏づけるかのよう

に、創刊号と第二号の表紙に掲げられていた「三好達治・丸山薫・堀辰雄編輯詩誌」という表示中の「詩誌」という言葉は、第三号以降みられなくなる。第二次「四季」の前身である季刊「四季」創刊に際して、堀辰雄は「こんど『四季』というカイエを出すことになりました」[4]といっていた。「カイエ」はフランス語で、帳面、ノートの意。小川和佑によれば、この言葉には「評論・小説・詩を一種の帳面に書きつけたようなもの」として「冊子にまとめた」のが季刊「四季」である[5]、という堀の考えが示されているが、「創刊までの一切の計画は堀辰雄の手になるもの」であり、「性格的には季刊「四季」の延長上にある」[6]第二次「四季」もまた、小説こそ掲載しなかったものの、そうした「カイエ」としての性質を多分に持ち合わせていた。

一九三五年一一月二一日の日記に「四季十二月号を読む。まあ此の雑誌はよい方なり」と記されているように、中原はそうした第二次「四季」の気質をそれなりに好ましく思っていたようだ。「よい方なり」といわれている「四季十二月号」は、一一月五日発行の第一三号。この号のどのような点を中原が評価したかはよくわからないが、その漠然とした言い方に、雑誌全体が醸し出している雰囲気への好感が感じられる。

ほどなくして、中原に「四季」同人への加入話が持ちかけられた。同年一二月一九日の日記に「四季より同人になれと云つて来る、諾と返事」とある。このことに関して、三好達治は次のような証言を残している。

> 河上徹太郎君があるとき、中原中也を「四季」の仲間に入れないかといった。よろしからう、と私は答へた。さうしてつむじ曲りの中原がこの仲間に加つた。紹介者は私の外にないが、紹介の労をとつた記憶はない。[7]

この証言に従えば、中原が「四季」同人に迎えられたのは、河上徹太郎による仲介があったから、ということになる。確かに中原は発表媒体の獲得に際して友人知己に依存していた節があり[8]、事実としてそのような仲介があったのだろうと思われる。しかし、中原が同人に加えられたのは、果たしてそれだけが理由だったかどうか[9]。水口洋治が指摘するように、「その作品を毎号掲載するとなると、何らかの処遇を考えざるを得なくなる」[10]。したがって、「精力的に寄稿してくる執筆者で水準に問題がないのであれば同人として受け入れるのが、編集者にとっても執筆者にとっても丸くおさまる形であった」[11]だろう。そして、中原が「精力的に寄稿してくる執筆者」のひとりであったことを考えると、仮に河上の仲介がなかったとしても、同人改編の際、中原が新たに加えられた可能性はきわめて高かったと思われる。それほど中原は、創刊以来、第二次「四季」に熱心に作品を寄稿していた。

同人改編が発表されたのは、一九三六年二月発行の「四季」第一五号。そのことを伝える「四季消息」には、次のように書かれている。

○「四季」は今月から組織の上に多少の改変をした。これまで同人であつた、三好、丸山、堀、津村、立原の五名に、事実上同人同等の厚志を寄せて貰つてゐた九氏を加へて、いまここにはつきりと四季同人として発表する。

われらはこれによつて何も一党一派の結成を強張しやうとするものではない。また狭き意味の文学上の新思潮、消長常ならざる詩壇的新運動を画するものでもない。主張するところは、われらの雑誌をして為さしめるかぎりに於いて、それらの消長の波間に在つてなほ永遠不易な詩の高き伝統の継承に与らしめやうといふにある。清純の精神と正しき態度。それによつてこれの一つをでも時代の芸術の上に加へ得ばわれらの倖である。

○それ故に「四季」は今後も出来るだけこの国の詩歌壇に眼を開き、われらの単純明瞭なる立場にもとらない広汎な範囲で、同人以外の原稿と雖も、詩、短歌、俳句、随筆、エッセイ、紹介、批評の優れたものあらば誌面を吝まぬ心掛けでゐる。この点切に大方の支援に俟つ多大であることを言ひ添へておく。[12]

この文章が、第二次「四季」が雑誌としてのみずからの意思を初めて外部に語ったものであることを、まずは確認しておこう。ここには、「われらはこれによって何も一党一派の結成を強張しやうとするものではない」といいながらも、「清純の精神と正しき態度」による「永遠不易な詩の高き伝統の継承」を今後の雑誌の目的とすることが示されている。引用後半をみる限り、雑誌の性質がそれまでと大きく変わるわけではなさそうだ。しかし、従来の「四季」が雑誌としての主義主張を持っておらず、むしろそのことが「四季」の唯一ともいえる思想だったことを考えると、「四季」にとってこの改編は重大な出来事だったといわないわけにはいかない。この同人改編を機に、第二次「四季」はその思想を大きく変化させていくのである。

このとき新たに同人に加わったのは、井伏鱒二、萩原朔太郎、竹中郁、田中克己、辻野久憲、中原中也、桑原武夫、神西清、神保光太郎の計九名。このうち、その後の「四季」の展開を考える上でもっとも重要だと思われるのは、その存在を無視して「現在は勿論、以後も「四季」を語ることは不可能である」[13]といわれる人物、神保光太郎である。

神保は同人加入と同時に、津村信夫とともに第二次「四季」の編集を担当することになった。神保といえば、まず第一に「日本浪曼派」との関わりが想起されるが、同誌の同人でありながら「四季」同人に加わったのは、神保によれば次のような判断があったからである。

最後に僕個人のこと。僕は「日本浪曼派」を創めた一人であり、現在も同誌同人であるが、「四季」への同人勧誘をうけた時、自分も考へ、他とも諮つたのであるが、浪曼派の名

に於て、尠くとも僕個人が意図するものと、「四季」が方向するものとは少しも矛盾するものではないと信じて同人加入を快諾した。そして、これは一言、詩も散文も問はず、日本文学界に正しき詩的精神を汎濫高揚せしめんとすること、この一事以外にない。[14]

神保は、「日本文学界に正しき詩的精神を汎濫高揚せしめん」という自分自身の「意図」と「「四季」が方向するもの」とは「少しも矛盾するものではない」という。また、同じ文章で神保は「「四季」が前月からはつきりと同人組織となつたことは、前号にもあつたやうに何ら党派的結成とか運動的方向をとるものではないが、紛然とした日本詩苑を貫く欝然とした主流動脈として存在せんとする意思表示に他ならない」[15]とも述べている。これらの発言からうかがわれるのは、神保は「日本詩苑を貫く欝然とした主流動脈として存在せん」こと、「日本文学界に正しき詩的精神を汎濫高揚せしめん」ことを期して、第二次「四季」に接近した、ということだ。神保自身は、「四季」が「はつきりと同人組織となつた」ことは「党派的結成とか運動的方向をとるものではない」と否定しているが、右でいわれていることが神保自身の考える今後の「四季」が目指すべき「運動的方向」性でなければ、果たして何だというのだろう。神保ほど激しい口調ではないが、ともに「四季」編集を担当した津村信夫も、同じ文章のなかで「この国の純正詩の発達と云ふ観点からする雑誌の使命」[16]について語っている。このような言説に導かれて、それまで主義主張を持たない雑誌だった「四季」は、「日本詩苑」「日本文学界」の中心的存在となることを目指していくのである。

その目的のためには、逆説的ではあるが、同人改編前と同じく、あるいは改編前以上に、雑誌としての主義主張を意識しないことが重要だった。それぞれの思想にこだわらずに同人を拡充し、また同人以外からも多く寄稿してもらうことこそ、「日本詩苑」や「日本文学界」にみずからの広範な勢力を示す最良の方法だからである。こうして「四季」は次々と同人を拡大していった。伊藤信吉によれば、その数は総計三二名、寄稿者は三〇〇名を超えるという。[17]のちに保田与重郎や伊東静雄らも同人に加わるため、「コギト」や「日本浪曼派」との類縁性が今日でもしばしば問題となるが、このこともまたそれぞれの詩人の思想にこだわらない、積極的な同人拡充の結果だったといえるだろう。

広い範囲から同人や寄稿者が集まってきたにもかかわらず、第二次「四季」が雑誌としての統一感を欠いているようにみえないのは、そこに集まってきた詩人たちの間に何らかの共通点がみいだせるからにちがいない。伊藤信吉は、「四季」と同時期に発行されていた代表的な詩雑誌に言及しながら「「歴程」の雑的、「新領土」のモダニズム、「詩人」のプロレタリア詩――以外の詩人たちが、ほとんどすべて「四季」に集った」[18]と指摘している。このことは、裏を返せば、モダニズムやプロレタリアートなどの思

想や主義を持つ詩人たちは「四季」に集わなかった、ということでもある。中村真一郎は「四季派」について「モダニズムの詩ではないし、いわゆる社会主義の詩でもない」、「かなり広い詩の傾向」を指す「伝統的な日本の感受性と一種の非常に新しい形、それから強い個性と一方で非常に洗練された感覚、そういうものを共通にもっている人たちのエコール」[19]であると述べているが、まさしく「四季」は「モダニズム」と「社会主義」を除いた、昭和一〇年代における最大公約数的な詩の「エコール」だった、といえるだろう。

二、

このようにして一大勢力となっていった第二次「四季」が、そこに依拠する詩人たちの意識はどうあれ、周囲からは芸術的な主義主張を持ったひとつの流派にみえたのは当然のことだったといえる。その周囲からの認識を示しているのが、右でも触れた「四季派」という呼称だ。管見に入った限りでは、この呼称が最初にみられるのは「コギト」一九三六年五月号掲載の山岸外史「虚無と英雄主義」であり、津村信夫がこれに五月一〇日発行の「四季」第一八号で「先月号のコギトで山岸外史氏が四季派詩人として、我々に論究する所あつたが、僕との久しい個人的友情はべつとしても「四季」についてかかる真実をもつて所論を述べてくれたことは非常に嬉しかつた」[20]と反応しているが、同人改編後まもなく「四季派」という言葉がみられ始めるのは、おそらく単なる偶然ではない。つまり、一九三六年の同人改編を機に、第二次「四季」は芸術的な主義主張を持ったひとつの流派として周囲から認識されるようになっていくのである。

その山岸外史の評論では、「四季派」について次のようにいわれていた。ここには、同人を改編したころの「四季」の詩が周囲からどのようにみられていたか、ということが示されていて興味深い。

> 近頃の詩人は、明らかに、末事に走つてゐる。ことに四季派一般の詩精神といふもの、――もとより、これは、『四季派』の詩人と自から矜持をもつ可きことではあるが、――この派の詩人は恰度『人生派』の流れを汲んでゐるらしく見えるのに、殆んど、人生苦をもつてゐないかのやうにさへ見え易い。苦言である。なにか姑息な生き方を考へ易く、詩の姿がなく声のみ軽ろやかに哀しく耳に響いてくる感じである。――これを『虚無の詩』と言つてよからうか。感傷ではないのか。凡て、麗しくもの優しき姿に似て、人生の行方も望みもなにひとつなしに、虚しい眼で、優しく町を歩いてゐる。[21]
> 「『人生派』の流れを汲んでゐる」ようでありながら「人生苦をもつてゐないかのやうにさへ見え」ること。「詩の姿がなく声のみ軽ろやかに哀しく耳に響いてくる感じ」がすること。これが、同人を改編したころの「四季」の詩に対して同時代の文学者が

持っていたイメージである。

一方、こうしたイメージの対極に位置しているのが「歴程」同人たちの作品だ。じつは、これまでみてきたような初期の第二次「四季」の動向は、「歴程」のそれと重なる部分が多くある。伊藤信吉は、「歴程」が「創刊宣言」や「同人の共同言」を掲げなかったこと、にもかかわらず第二次創刊にあたる一九三六年三月発行の通巻第二号で「僕等は歴程がこの国で一番すぐれた詩の雑誌になることを無論自負してゐる」[22]と高らかに宣言されていることを指摘し、「先行の他誌を差し措いて、こういう不遠慮な自負言を述べるところに「歴程」の野人的、雑草的特異さがある」[23]と述べている。しかし、「創刊宣言」や「同人の共同言」を掲げなかったのは同人改編前の第二次「四季」も同じであり、「不遠慮な自負言」も「四季」同人改編時の「紛然とした日本詩苑を貫く欝然とした主流動脈として存在せん」という神保光太郎の「意思表示」に通じている。したがって、そのころの「歴程」に第二次「四季」が持っていない「野人的、雑草的特異さ」があるとすれば、むしろそれはほかのところに表れているだろう。

では、その表れは一体どこにみられるのか。当然のことながら、やはりそれは作品である。伊藤によれば、「歴程」同人たちの詩は「生ぐさいまでの個性的、偏奇的、暴力的な作品生命」[24]を持っている。また、「同人すべての個性が強ければつよいほど、雑誌そのものは方向ある運動になりにくい筈」で、その結果「歴程」は「運動の〈無い〉雑誌」[25]となったが、にもかかわらず「当時の詩の世界における「歴程」の存在感は強烈で、それはまた各篇、各人の個性的表現の鮮烈さを意味した」[26]。つまり、「生ぐさいまでの個性的、偏奇的、暴力的な作品生命」を持った「各篇、各人の個性的表現」が、その「個性」のぶつかり合いによって「野人的、雑草的」というイメージを「歴程」にもたらしているのである。

その「個性的表現」の集まりによって形成された雑誌全体のイメージを、伊藤は別の文章で次のように総括している。

ある統一された性格を当時の『歴程』にもとめることは困難だけれども、しかしアカデミックでないもの、甘ったるくないもの、翻訳的でないものという、そういう個性の集りはひとつの文化的意義をもっていた。そのような雰囲気において『歴程』は個性的であり、反時代的であった。そして部分的には生活そのものが〈詩〉であるという、そういう詩人の生き方が、まだいくらかは残っていた。[27]

「アカデミックでないもの、甘ったるくないもの、翻訳的でないもの」という点にこそ、「歴程」における第二次「四季」との最大の違いがあるのはいうまでもないが、そのことについては今は問わない。右の引用で注目したいのはむしろ後半である。「歴程」同人たちの作品にみられる詩と「生活」との近しい距離。そこではしばしば「生活そのものが〈詩〉であ」ったということ。一

方、先に述べたように「人生苦をもつてゐないかのやうにさへ」同時代の文学者からみられていたのが、同人を改編したころの「四季」の詩であった。つまり、第二次「四季」と「歴程」の詩のイメージは、そのなかに「人生」や「生活」をどう取り込んでいるか、という点においてまさしく対極に位置しているのである。

そのような二者択一の文脈でいえば、やはり中原は「歴程派」であった。中原の詩は「逃げられなく生れついた苦しみがそのまゝ歌になって」おり、「生々しい生活感情にあふれてゐる」[28]からである。ただし、中原はそうした「生れついた苦しみ」を歌っているような作品、「生々しい生活感情にあふれ」た作品を、「歴程」だけでなく「四季」にも発表していた。たとえば、一九三六年六月発行の「四季」第一九号に発表された「わが半生」。

私は随分苦労して来た。／それがどうした苦労であつたか、／語らうなぞとはつゆさへ思はぬ。／またその苦労が果して価値の／あつたものかなかつたものか、／そんなことなぞ考へてもみぬ。／／とにかく私は苦労して来た。／苦労して来たことであつた！／そして、今、此処、机の前の、／自分を見出だすばかりだ。／じつと手を出し眺める程の／ことしか私は出来ないのだ。／／外(そと)では今宵、木の葉がそよぐ。／はるかな、気持の、春の宵だ。／そして、私は、静かに死ぬる。／坐つたまんまで、死んでゆくのだ。

それまで「私」は「語らうなぞとはつゆさへ思は」ないほどの「苦労」をしてきた。しかし、その「苦労」から解放された今、「私」には「じつと手を出し眺める」ことぐらいしかできない。「今、此処」で「静かに死ぬる」日の訪れを待つばかりの「私」。つまり「私」は「苦労」以外に生きていく術を知らないのである。「苦労」のない人生など「私」には考えることができないのだ。だからこそ今、「私」はただ「坐つたまんまで、死んでゆく」のを夢想しているのだろう。

「私」にとって、生きることとはすなわち「苦労」することにほかならなかった。そのことが示されている点において、この作品は「人生苦をもつてゐないかのやうにさへ見え」る「四季派」の詩と正反対の性質を持っている。また、そのような生のあり方が歌われているという点において、ここには「生活そのものが〈詩〉である」という「歴程派」の特徴に通じるものをみることができる。そのような詩を、中原が「歴程」でなく第二次「四季」に発表していたということ。このことは、中原のなかで両者の雑誌イメージが特に区別されていなかったことを示していると同時に、第二次「四季」において中原がいかに異質だったか、ということを端的に物語っているのではないだろうか。

三、

吉本隆明は、戦後における第二次「四季」の評価に多大な影響

を及ぼした「「四季」派の本質」のなかで、「四季派」の詩人たちの内部には「西欧的近代意識と日本的伝統意識とが、あまり矛盾・対立・葛藤を経ずに原始的な形で併存していた」[29]ことを指摘している。こうした「四季派」の性質を中原もまた多分に持っていたことは、中原がランボーの翻訳者として知られる一方、数多くの文語定型詩を残していることより明らかだ[30]。しかし、その「四季派」としての性質を覆い隠してしまうほどの個性が、中原の詩にはあった。その個性の一端が、中原の詩における「人生」や「生活」の取り込み方にみられることは、これまで確認してきた通りである。そして、その個性こそ、中原は第二次「四季」において異質だった、というイメージをわたしたちに抱かせている最大の要因なのだろう。

中原を異質な存在ととらえていたのは、当の第二次「四季」同人たちも同じである。異質であるがゆえに、中原の詩は「四季」同人たちからしばしば批判された。たとえば、立原道造が中原没後、その詩を次のように批判したことは今日よく知られている。

心のあり方をそのままにうたひはしたが、あなたはすべての「なぜ？」と「どこから？」とには執拗に盲目であつた。孤独な魂は告白もしなつた（ママ）。その孤独は告白などむなしいと知りすぎてゐた。ただ孤独が病気であり、苦しみがうたになつた。だから、そのうたはたいへんに自然である。しかし、決して僕に対話はしない。僕の考へてゐる言葉での孤独な詩とはたいへんにとほい[31]。

「孤独が病気であり、苦しみがうたになつた」中原の詩。その「うた」が他者に何かを伝えるような「告白」となっていないこと。確かに、先に取り上げた「わが半生」でも、「随分苦労して来た」という過去の記憶が歌われているものの、「私」はその「苦労」について「語らうなぞとはつゆさへ思は」ず、「告白」することを拒否してしまっている。したがって、中原の詩に「対話」が感じられないという立原の指摘は、あながち間違いとはいいきれない。

もともと立原は、「四季」第一八号に発表した「或る不思議なよろこびに」[32]のエピグラフに『山羊の歌』所収の「無題」の一部を掲げたり、第九号掲載の中原の詩「倦怠」を一九三五年九月四日付柴岡亥佐雄宛書簡に引用して「この詩の三行が僕の心情であつた」[33]と書いたりするほど、中原の詩にシンパシーを感じていた。その立原が右のように中原を批判したことには、詩に対する立原自身の志向性の変化が示されているだろう。

しかし、わたしはここで立原による中原批判の中身や立原自身の志向性の変化を問題にしたいのではない。むしろ注目したいのは、このような「四季」同人による「四季」同人批判が「四季」誌上で展開されているという事実である。この批判を読み、第二次「四季」の読み手でもあり書き手でもあった詩人たちは、果たして何を思っただろうか。

三好達治もまた、立原と同じく中原を激しく批判した「四季」同人のひとりである。三好は、中原の詩のいくつかには高い評価を示したが、中原の詩業全体についてはあまり評価していなかった。三好がもっとも激しく中原の詩を批判したのは、『在りし日の歌』刊行後まもなく「帝国大学新聞」に掲載された詩時評「ぶつくさ」である。そのなかで三好は、「私の好みからいへば私はこのやうな傾向の詩人を特に偏愛するのには甚だ躊躇を覚える」[34]とつぶやきながら、『在りし日の歌』所収の「夏の夜に覚めてみた夢」を次のように批判している。

こんな風のレアリズムを、主観のとぼけた対象への捕はれ方を、私はやはり非詩として、根こそぎの否定を以て否定しないではゐられない。「在りし日の歌」の著者は、その異常な体質と、その異常に執拗な探究力とで、まことに奇異な詩的世界まで踏みこんだ詩人だつたが、彼にはつひに最後まで、極めて初歩的な認識不足――外部からは窺知しがたい宿命的な、それが彼の長所でもあつた不思議に執拗な独断に根ざした、その認識不足からつひに救はれずに終つたやうである[35]。

三好が「非詩として、根こそぎの否定を以て否定しないではゐられない」とする「夏の夜に覚めてみた夢」の初出は、一九三五年九月発行の「四季」第一一号[36]。つまり三好は、「夏の夜に覚めてみた夢」という作品を批判しながら、「四季」における中原の詩活動をも同時に「根こそぎの否定を以て否定し」ているのである。おそらく三好は、第二次「四季」に中原の詩は似つかわしくないと考えていたのだ。だからこそ、三好は右のように激しい口調で中原の詩を批判したのだろう。

「四季」同人たちから批判される中原の詩。時にその詩は「非詩として、根こそぎの否定を以て否定」されたということ。もしあるとすれば、そこにこそ第二次「四季」にとっての中原中也の存在意義をみることができるのではないだろうか。

複数の「四季」同人が中原の詩を否定することで、中原的でない詩を「四季」は志向する、という雰囲気が第二次「四季」の内部に形成されていく。そのような雰囲気は、神保光太郎らの言説や当時の時代状況などと相俟って、やがて「四季」同人たちをひとつの方向へと導いていくだろう。その方向の延長線上に、一九三六年の同人改編のころからみられ始めた「四季派」のイメージが確立していく、といっては牽強付会であるだろうか。

もちろんこのことは、中原没後の「四季」の展開を視野に入れて、より慎重に再検討されなければならないが、少なくとも自分たちの内部より中原を排除しなければ、第二次「四季」が自己イメージを確立できなかったことは間違いない。そのことを具体的に示しているのが、一九四一年三月に山雅房より出版された丸山薫編『四季詩集』である。

このアンソロジーには、三好、丸山、朔太郎らはもちろん、第

二回中原中也賞を受賞した高森文夫や一九三九年に没した立原など、計二四名の「四季」同人たちの作品が収められている。同書の「後記」に「後進の人々のうちに人選を洩れた主要な方々も定めしあらうと思ふ」[37]と記されているところをみると、「後進」ならぬ先進の詩人はすべて網羅した、という意識が編者の丸山薫にはあったようだ。また、同じ「後記」には、「人選に当つては、「麺麭詩集」及び「コギト詩集」との牴触を避けるために、北川、田中の二君と相談した」[38]とも書かれている。しかし、「麺麭」「コギト」いずれの同人でもなかった初期の第二次「四季」で活躍した先進の詩人、中原中也の詩は、「四季」の名を冠したこのアンソロジーに収録されなかった。（了）

注

（1）小川和佑『「四季」とその詩人』有精堂出版、一九六二年一二月、二―三頁。

（2）丸山薫「「四季」発足の頃など」、『「四季」複刻版　別冊解説』日本近代文学館、一九八六年二月第二版、二頁。

（3）三好達治「燈下言」、「四季」第二号、四季社、一九三四年一一月、五八頁。

（4）堀辰雄「『四季』発刊の辞」、「限定出版江川書房・四季社月報」第七号、江川書房、一九三三年五月、五〇頁。

（5）小川和佑、前掲書（1）、七頁。

（6）同右、一三頁。

（7）三好達治「をちこち人」終回、「新潮」第五八巻第一二号、新潮社、一九六一年一二月、二二頁。

（8）拙稿「中原中也、その文学的出発――「朝の歌」から「白痴群」創刊前後まで――」、「日本文学研究」第三九号、梅光学院大学日本文学会、二〇〇四年一月参照。

（9）このことについては、別の機会にも考えたことがある。拙稿「「四季」同人になった中原中也」、「四季派学会会報」第二七号、四季派学会大阪事務局、二〇〇一年四月参照。

（10）水口洋治『堀辰雄と開かれた窓『四季』』竹林館、二〇〇一年四月、七五頁。

（11）同右、同頁。

（12）「四季消息」、「四季」第一五号、四季社、一九三六年二月、五九頁。

（13）小川和佑、前掲書（1）、三六頁。

（14）神保光太郎「後記」、「四季」第一六号、四季社、一九三六年三月、六四頁。ちなみに、三好達治は神保の「四季」同人加入について「神保光太郎君は彼独自に、君らの仲間に加はらんと欲する希望をもつ、と私に告げた。よろしからう、と私は答へた」と述べている。前掲文（7）、二二―二三頁。

（15）神保光太郎、前掲文（14）、六四頁。

（16）津村信夫「後記」、前掲書（14）、六五頁。

（17）伊藤信吉「解説」、前掲書（2）、一〇頁参照。

（18）同右、同頁。

（19）中村真一郎「堀辰雄と四季派」、『日本の近代詩』読売新聞社、一九六七年一二月、二七四頁。

(20) 津村信夫「後記」、「四季」第一八号、四季社、一九三六年五月、七四頁。
(21) 山岸外史「虚無と英雄主義」、「コギト」第四八号、コギト発行所、一九三六年五月、一一頁。
(22) 「歴程由来記」、「歴程」第二号、歴程社、一九三六年三月、四四頁。
(23) 伊藤信吉「解説　全二十六冊の年月」、『「歴程」戦前版（昭和十年五月～十九年三月）複刻版　別冊解説』日本近代文学館、一九八五年一〇月、一二頁。
(24) 同右、同頁。
(25) 同右、同頁。
(26) 同右、一三頁。
(27) 伊藤信吉『「歴程」についての二章』『逆流の中の歌　詩的アナキズムの回想』泰流社、一九七七年一〇月、二五九頁。
(28) 小林秀雄「中原中也の「山羊の歌」」、「文学界」第二巻第一号、文圃堂書店、一九三五年一月、八九頁。
(29) 吉本隆明「「四季」派の本質――三好達治を中心に――」、「文学」第二六巻第四号、岩波書店、一九五八年四月、四九〇頁。
(30) 中原の「伝統」に対する意識については、拙稿「「書く」行為の背後にあるもの――宮沢賢治と中原中也――」、「日本近代文学」第六八集、日本近代文学会、二〇〇三年五月参照。
(31) 立原道造「別離」、「四季」第三七号、四季社、一九三八年五月、五七頁。
(32) 『暁と夕の詩』（風信子詩社、一九三七年一二月）で「失なはれた夜に」と改題。詩集ではエピグラフは削除されている。
(33) 『立原道造全集』第五巻、角川書店、一九七三年二月、一四七頁。なお、この書簡が立原の文章に中原の名前がみられる最初であるが、句読点の異同などから、中原の詩は萩原朔太郎「詩壇時感」（「四季」第一〇号、一九三五年八月）から引用されたものと思われる。
(34) 三好達治「ぶつくさ」、「帝国大学新聞」一九三八年五月二三日。
(35) 同右。
(36) 初出時の題名は「夏の夜に覚めて見た夢」。
(37) 丸山薫「後記」、『四季詩集』山雅房、一九四一年三月、三二七頁。
(38) 同右、同頁。なお、「北川」は北川冬彦、「田中」は田中克己。

※本稿は、「日本文学研究」第四四号（梅光学院大学、二〇〇九年一月）掲載の「第二次「四季」創刊前後の中原中也――「四季」における中原中也、中原中也における「四季」（1）――」、および「論集」第四三号（梅光学院大学、二〇一〇年一月発行予定）掲載の『在りし日の歌』非収録の第二次「四季」発表詩篇からみえてくるもの――「四季」における中原中也、中原中也における「四季」（2）――」の続稿である。ご併読いただければ幸甚である。また、本稿は二〇〇九年度四季派学会夏季大会・日本現代詩研究者国際ネットワーク合同研究会での口頭発表に基づくものである。会場内外で貴重なご教示を賜った諸氏に感謝申し上げる。なお、中原中也の文章は、角川書店版『新編中原中也全集』を本文とし、適宜各掲載誌を参照した。引用に際し、一部を除いて旧字体は新字体にあらため、ルビは省略した。